

研 修 参 加 報 告 書

令和 7 年 7 月 2 9 日

会 派 名 江南新風クラブ
会派代表者 伊藤 吉弘

参加者：尾関 昭、藤岡 和俊

研修参加の結果について、次のとおり報告します。

年 月 日	令和7年7月28日（月）～7月29日（火）
研修時間	7月28日（月）13：00～7月29日（火）12：30
研修場所	全国市町村国際文化研修所（J I A M）
研修内容	令和7年度第2回市町村長等・議会議員特別セミナー 7月28日（月） 【講義】13：15～14：45 演題：真の意味での持続可能な都市を目指して 講師：久元喜造 氏（神戸市長） 【対談】15：05～17：05 演題：地域の魅力を引き出す文学の力 講師：三宅香帆 氏（文芸評論家）、宮島未奈 氏（小説家） 17：50～交流会 7月29日（火） 【講義】9：00～10：30 演題：明日を生きるために－人文知を地域に生かす－ 近世国学から学ぶ 講師：松本久史 氏（國學院大學神道文化学部教授） 【講義】10：50～12：20 講演：みんながやりたい場所をつくる廃校利活用施設 『いいかね Palette』の運営について 講師：樋口聖典 氏（株式会社 B00K 代表取締役会長）

研 修 参 加 報 告 書

■目的

日々めまぐるしく変わりゆく国内外の情勢の中で、様々な行政課題について学び、施策を提案・実施していくことが求められている。

今回のセミナーでは、現代社会の行政課題を捉え直すとともに、今後のわがまちの未来や地方行政に求められる役割について多角的に考える。

■内容

令和7年度第2回市町村長等・議会議員特別セミナー

7月28日（月）

【講義】 13：15～14：45

演題：真の意味での持続可能な都市を目指して

講師：久元喜造 氏（神戸市長）

想定を上回るスピードで出生数の減少が進んでいる。国立社会保障・人口問題研究所の予測より大幅に乖離している。出生数が70万人を下回るのは2038年と予測していたのに、2024年に割り込んでしまった。これは国民が失望しないように緩く予測したのではないか。私も市議から、人口を減らさないようにするのが市長の仕事であり、やる気がないのではないかと叱られることがある。中国や韓国では日本より合計特殊出生率が悪い数値になっており、いろいろな取り組みをしているが回復しない。これは1つの自治体だけでは取り組めない。

三大都市圏という言葉は死語になっており、今は東京一極集中である。しかし、国の政策はそれに伴っていない。政令指定26都市のうち13都市で人口が減少している。昨年は、約89%の市町村で人口が減少。人口が増加している11%の市町村から人口が増えるモデルを探して、真似なければならぬのだろうか。

財政力が豊かな東京都の独自施策には、「手厚い子ども・子育て支援」「高等学校等の授業料無償化」「幅広い人材獲得施策」などがある。東京都へ人材・資金が集中すれば、国全体として共倒れになる可能性がある。多極分散型社会への移行が必要ではないか。

空き家数・空き家率はともに増加している。結果、都市のスポンジ化が進行し、地域の脆弱化が進む。将来は廃墟となる。

築40年以上のマンションストック数が増加、老朽化したマンションの維持管理が課題になっている。

神戸市では都心に人口が集中しないように、タワマンの規制を行った。タワマンが廃墟になる可能性や大規模災害の対応に大きな困難をきたす可能性があるためである。そのため郊外の拠点となるまちづくりを行っている。

活用されていないインフラを活用していく。北神線の市営化（谷上から三宮の運賃が550円から280円に）、空き家の活用促進事業、森林・里山の再生（9割が広葉樹林、プラットフォームが民間事業者の木材利用を調整）、耕作放棄地の再生（神

戸ネクストファーマー制度、短期間の農業研修を条件に農地を借りることが可能)、木材の廃材をチップにした舗装材を利用するなど、神戸市は真の意味での持続可能な都市を目指している。

既にある都心のタワマンでは、投資目的からなのか空室が目立っている。このタワマンの空室から空室税を取れないかを有識者会議で検討中である。

【講義】 15 : 05 ~ 17 : 05

演題：地域の魅力を引き出す文学の力

講師：三宅香帆 氏（文芸評論家）、宮島未奈 氏（小説家）

＜対談＞

「成瀬は天下に取りにいく」「成瀬は信じた道をいく」の作者で大津市在住の小説家宮島未奈氏と京都市在住の文芸評論家三宅香帆氏の対談。

小説の中では実際にある場所を、フィクションとして扱っている。膳所の名前がこれほど全国に広まるとは思わなかったが、小説に出てくる膳所はフィクションの膳所であり、実際の膳所とは違う。ときめき小学校も、その場所に小学校はあるが名前は違う。

「婚活マエストロ」はすべて想像で書いた。舞台の浜松はどうやって決めたのか。編集者と話し合っ、最初は架空の町が舞台であったが、実在の都市の方が面白いとなった。最初に婚活バスツアーを小説で書こうと思って、日帰りで行けるところから浜松となった。よくどうやって取材したのかと聞かれるが全部想像である。どこかで編集者よりダメ出しがあると思ったが、1つもなかった。小説の中で登場人物が成長していく話なので、自分としてはとても好きな作品である。

他人の小説はよく読むが、自分で取り入れようとは思わない。読者として、面白いとか面白くないかは思う。

自分の小説がまちおこしにつながったのは嬉しいが、まちおこしのために書いた小説ではなく、たまたま滋賀に住んでいたから滋賀を舞台にただけであって、少し戸惑っている。

たまに関西の話なのに、関西弁が出てこないと言われるが、それもフィクションとしての表現方法で、標準語で良いと思っている。良いことばかり起こるが、それもフィクションだから良いだろうと思っている。

何か物語の中で事件を起こそうとすると悪い登場人物が必要だが、何かを起こそうと思っていないので、良い人物ばかりの話でも良いと思う。悪い登場人物が出てくる小説はたくさんあるので、このような小説があっても良いと思っている。

漫画化されているが、それはそれで良いと思っている。面白いと思って読んでいる。ダメ出しはしていない。漫画家も滋賀の方なので、現地にも行って、リアルな絵になっている。

イメージとしては、成瀬は美少女として書いていた。

まちづくりのために小説を書いたわけではないが、小説を読んで聖地巡礼の形で訪れる方が多いということは、大津市にもともと力があつたのではないかなと思う。その大津の魅力を小説で伝えられたのは良かったと思っている。

ただ、小説が自分の手から離れてしまっていくのには少し戸惑いもある。映画化やテレビ化の話をいただいても、小説の世界を壊されないように監修をすることもできるが、その分仕事が増えてしまって、本来やりたい仕事である小説を書くことができなくなってしまうので、それは困ることになる。

たまたまその地域を題材にした作品（小説や映画など）が世の中に受け入れられた際に聖地巡礼という結果が付いてくる。まちおこしから作品を作っていくことはないと思う。

17:50～交流会

7月29日（火）

【講義】9:00～10:30

演題：明日を生きるために－人文知を地域に生かす－

近世国学から学ぶ

講師：松本久史 氏（國學院大學神道文化学部教授）

国学とは、近世中期に新たに発生した、日本古代の文献（古典）を対象とした実証的な研究に基づき、日本固有の歴史やカミ信仰・倫理道德の追求のみならず宇宙観・世界観におよぶ独自性や普遍性を主張していった学問である。

古典が刊行されたのは江戸時代初期の寛永年間である。しかし、出版されたのは原文であり、内容を理解することは困難であった。これらの古典を「読める」から「理解できる」ものにしたのが国学者である。それにより、古代日本人の文化や精神、信仰のあり方がわかるようになった。

国学四大人（荷田春満、賀茂真淵、本居宣長、平田篤胤）により、学問としての国学に裏付けられた神道説を復古神道という。

本居宣長は、古い習慣は地方に残存しているとした。古語から古代文化の解明へという方法論が国学の基本であり、多くの近世成立の地誌は国学者が深く関与している。地誌編纂を通して、地域の信仰や風習などの民俗（地域文化）に対するまなざしが生じる。地域文化のコーディネーターとしての役割を国学者が果たしていたことに注目すべきである。

19世紀に入ると天保期（1830年代）前後に、幕藩政治の矛盾が露わとなり、社会問題が顕在化し、地域の課題を解決しようとする「草莽の国学者」が誕生する。

小西篤好は『農業余話』（文政11年：1828）刊行、篤胤・鋈胤が校訂した。苗に雌雄あり、と主張。好評を博す後年「農聖」と称された。

中山信名・色川三中・栗田寛は、いずれも常陸国出身の国学者である。時代を超え、資料を継承しそれを公開していった。同書は現在の茨城県の郷土史を語る上で、基礎的な資料になっている。

地域文化のコーディネーターとしての各地域で多くの国学者が活躍してきた。

地域の文化・伝統の「再発見」による地域振興の可能性がある。都道府県ごとに「文化財保存活用大綱」が作成されている。大綱に基づき、各市町村は「文化財保存活用地域計画」を策定（マスタープラン兼アクションプラン）することができる。国学は、未来の社会をコーディネートする可能性がひらけている。

【講義】 10 : 50 ~ 12 : 20

講演 ; みんながやりたい場所をつくる廃校利活用施設

「いいかね Palette」の運営について

講師 : 樋口聖典 氏 (株式会社 BOOK 代表取締役会長)

いいかね Palette は、2014 年統廃合となって生まれた廃校、旧猪位金小学校を利活用して「音楽を中心とするコンテンツ産業の創出・集積」を目指して作った会社である。

「廃校」とは、過疎化や都市化等による児童・生徒数の減少によりおき、日本全国の公立学校での廃校の数は 8,850 校。そのうち活用が決まっていない学校が 25% もある。

田川市は石炭でにぎわった町であったが、石炭産業が撤退したのち、10 万人の人口が 5 万人に半減した。完全失業率も高い。

「廃校」の所有権は市に残したまま、運営を自由に行える契約、体育館がいらなかったら壊しても良いし、グラウンドに建物を建てても良い。

活用の仕方は、公共施設、体験・交流施設、工場など。しかし、活用しているところでも、業績の悪化による廃校活用の撤退ニュースもまた増えている。

廃校運営では、耐震問題、浄化槽問題、消防法や消防施設問題、宿泊事業における特定防火対象物問題、衛生保健所など、多くの問題が発生している。

いいかね Palette は 2017 年にオープンしてから、話題になり、様々なメディアに取り上げられ、当時のメンバーは 13 人、東京支社も作ったが、1 年後資金ショートになり、倒産の危機となった。

3 人で事業を継続し、軌道に乗ってきたところにコロナ禍となったことを機会に、やらなければならないのではなく、やりたいことをやろうとなった。

町のいたるところで「やりたい」が広がり、それが地域経済を活性化していく、誰かの「やりたい」が新たなコンテンツの火種になることがわかった。

駐車場を舗装するためにクラファンをやったところ、500 万円の目標に対し、2000 万円が集まった。これは、今までの活動が評価されたのと、事前準備をしっかり行ったからではないか。クラファンが始まってからも毎日更新するなど、真摯な態度が評価された。信頼の蓄積と未来への期待で達成できたのではないだろうか。

人は経済的合理性で動くとう都会に集まってしまう。実は多様性の担保をした方が合理的ではないだろうか。マイノリティを救うことも必要である。実は子どもがダウン症であるが、障害者福祉でそれを学んだ。

人が自由になるためには多様性が必要である。明確なビジネスモデルはなく、そこにいる人によって有機的に変わっていく。社会的経済合理性の「傍ら」にいる人がたどり着き、何かをする。才能が開花することが、確率論的に起こす。

地域創生は結果である。目的にすべきではない。地域で活躍している人は地域創生だとは思っていない。

いいかね Palette は、経営されていない状態にしたい。

まさに「自治体」である。地域の人たちにとって残したいと思ってもらえる施設にしたい。

■所感

全体を通して、本人のやろうとする行動力や実行力が大切であると感じた。この結果を考えて行動をしていたのではないが、結果として良い方向に広がっていつている。やらなければならないことをやるのではなく、やりたいことをやることで良い結果を生んでいる。そのことにこだわりを持ち、熱心に取り組める人が事業を推進していく。まずはそのような「人」が必要である。